大地から小さな学校のおたより

ブラジル第３アリアンサ富山県日本語学校便り　　ＮＯ１１　６月号

　アリアンサは本当に寒いです。朝晩だけではなく、昼も寒いです。しかし日本語学校は、温かくなってきました。と言うのも、生徒が２人も増えたからです。今では子どもたちが 14 人、夜学生が 10 人で、とても忙しくなってきました。村の皆さんも子どもたちが増えたことをとても喜んでいます。かつては日本語学校の生徒が 40 人近くいたこの村も、過疎化の波が押し寄せています。でも外から、わざわざ通ってくれる子どもたちが増えてくることで、この学校が活性化してくれることを切に望みます。

ワニ発見！

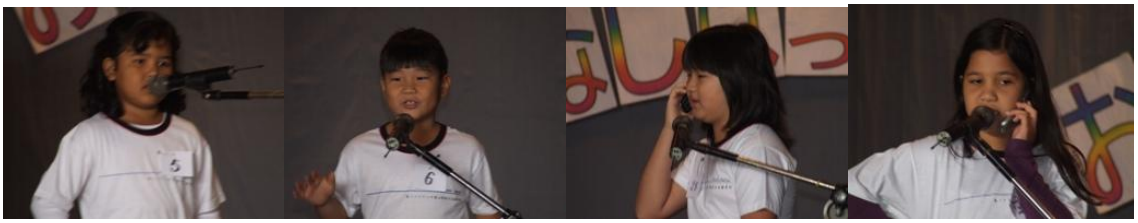
　アリアンサには、ため池がたくさんあります。この写真は、生徒の家にあるため池です。今回はここで、生徒や保護者と一緒に魚釣りをしました。すると
「せんせい　ワニ！　ワニがいるよ！！！」
と大きな声が聞こえてきました。すかさず持っていたカメラで撮りました。アリアンサのため池では、ワニを見ることは珍しくありません。いつもはため池でこのように泳いでいるそうです。どれがワニか分かりますか？

バスが脱輪です！！！

　先日、高学年お話発表会の付き添いで、バスに乗ってアラサツーバまで行ってきました。お話発表会が終わり、アリアンサへ帰る途中、急に「ガタン」とバスが傾きました。何事かと思ったら脱輪でした。バスが止まった場所はアリアンサから近かったので、保護者の人を呼び、無事に家に帰ることができました。一つ間違えれば大惨事になるところでした。
　残念ながら、今年の高学年お話発表会には、第３アリアンサの子どもたちは参加しませんでした。ほとんどが、サンパウロ州陸上競技大会に選手代表として参加しなければならなかったからです。第３アリアンサの子どもたちはとても運動神経が良いそうです。

低学年お話発表会がありました

　今年のお話発表会では「家族のはなし」「でんわ」のコントをしました。話し言葉を中心に、お互いのやり取りを重視した内容にしました。話し言葉は、２世３世の日系人にはよく使われています。少しでも話し言葉を勉強し、家や村で使うことができるようにしてみました。さらにコントなので皆さんに笑ってもらうような内容にしました。「お笑い」は、もう日本の文化の一つと言ってもよいほど、日本に定着しています。そして、日本語教育には、とても良い題材でもあります。話し言葉を中心に物語が展開され、その日本語を理解したとき、「笑い」となって、聞く人から反応が来ます。日本語を通じて、これほどのコミュニケーションを会場全体で味わえるのは、「お笑い」の素晴らしい点でもあります。当日子供たちが素晴らしい発表をしてくれたので、皆さんに笑ってもらいました。そしてなにより、子どもたちは前日、みんなで集まって何時間も練習していたそうです。学校以外の場所で自分たちでがんばっていた話を聞き、私はとてもうれしくなってしまいました。本当に素晴らしい発表ありがとう。



こんな夜学をしています。初級日本語クラス編

先月号で、夜学が再開されたことを伝えました。このクラスは、日系人の奥さんで、かつ非日系で日本語の分からない人を対象に、授業をしていました。「あいさつ」、「返事」「好きです、嫌いです」、「ましょうか」「でんわ」など、この村で必要な日本語の勉強をしました。写真では日系人のおばさん役になってもらっています。「ちょっと手伝ってください」「はいわかりました」、「今なにしているの」「洗い物をしています」少々、嫁姑を意識しながら授業の内容を組んでみました。その他、手作り電話を使用しながら、会話練習もしました。みなさん、とても楽しく授業を受けていて、笑いの絶えない夜学でした。次回は９月に４回講座で授業を再開する予定です。今度は何をしようかな…。

アリアンサ饅頭

６月 14 日アルモッソ（昼食会）が開かれました。この昼食会は第３アリアンサで、よく開かれます。うどん会、夕食会などと同じで、村や日本語学校などの運営資金を集めるための行事です。そのたびに、よく登場するのが、このアリアンサ饅頭です。こしあんの入った焼き饅頭で、とても美味しいです。私はよく、お手伝いをするのですが、饅頭のあんを包む速さでは、おそらく第３アリアンサ１だと思います。村の人にはよく「先生速い！」と言われ、私もいい気になってどんどん手さばきが早くなってしまいました。もしかすると、「村の人たちのおだて上手は戦略かな?」とふと我に帰る時がありますが、あん包みは、とても楽しいです。いつかアリアンサに来たら食べてみてくださいね。

あいさつから見える日本人

４月から、小さな子供たちが日本語学校にやってきました。私はあいさつを教えているのですが、「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」「おやすみなさい」これらは日本人ならばよく使うあいさつですから、当然のことのように教えています。しかし、何気なく教えているうちにあることに気が付きました。よく考えると家で使う言葉と使わない言葉があるのです。これらの言葉は時と場合をきちんと分けて使用していることに気がついたのです。「何を言っているんだ、そんなことは当たり前だろ」と思う人ならすぐ分かることかもしれません。でも慣れ親しんでいる母語和者は、「あいさつ」の使い分けを明確に意識しているのでしょうか。

これらの言葉は「おはよう」「やー」「おー」「じゃーね」「ばいばい」「おやすみ」などの言葉に置き換えることができます。つまり話をする相手に対しての心理的な距離感、社会的地位などに基づいて言葉が変わってくるのです。さらに、あいさつをするトーンによっては、相手に対する意識、自分の健康状態まで伝えることができるのです。

では日本人と外国人との会話ではどうでしょうか。私が日本にいた時、ある外国人が日本語を話すと「日本人よりきれいな日本語を話しますね」と言われ、困っている外国人の話を聞いたことがありました。また私の外国人の友人は「日本人は助詞が大切だと言っているけど、助詞を使って話をする人はあまりいないのではないか。文型が違うから混乱する」と言っていたことを思い出します。

外国人がせっかく勉強した丁寧語を使っても、返ってくる言葉が丁寧語ではないと、コミュニケーションに障害をもたらすのです。とすると、外国人が日本で生活するには、社会的地位、心理的な距離感、上下関係、それらにあった日本語をさらに習得した方が日本人を理解しやすいのではないかと考えられないでしょうか。言い換えれば、日本人は外国人に対してどのように接しているのか、どのような存在であってほしいのか、とっさのあいさつ一つで、自身の外国人に対する考え方が見えてくるのだろうと思います。

今頃こんなことを言っている私が言うのもおかしなことですが、「ＫＹ（空気がよめない）」人には、いろいろな人がいます。もしかすると、日本語のあいさつ一つにしても時と場合を使い分けることができない人のことも言うかも知れませんね。「おはよう」「おはようございます」「おはようさん」「おっはー（古いかな？）」「……」あなたなら誰に対して、どのトーンで、どの言葉を使いますか。

今月号の挿絵「大地の日記、―大地の中で―」2009 年６月制作